

シアトルの日本人移民仏教徒 —1913年から1924年の『佛之教』から—

本多彩

(兵庫大学共通教育機構准教授)

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. シアトル仏教会と『佛之教』
4. 仏教会活動と移民仏教徒の宗教心
5. 開教使から在米仏教徒へ：「會説」から
6. おわりに—来年度に向けて

【キーワード】

日本人移民 在米仏教徒 浄土真宗本願寺派北米仏教団 シアトル仏教会 宗教性

1. はじめに

グループ1ユニットB「近代日本仏教と国際社会」は、明治期から戦中の資料を中心に日本仏教を海外との関係という視点で各方面から検証し、研究会やワークショップ、シンポジウムを通して広く学内外に発表してきた。

このワーキングペーパーでは戦前にアメリカ本土で発行されていた寺報を紐解きながら、浄土真宗本願寺派仏教会（寺院）活動や日本人移民仏教徒について取り上げる。資料はアメリカのワシントン州シアトル仏教会（沙市仏教会、沙都仏教会とも表記されていた。現在はシアトル別院と呼ばれる）が戦前発行していた『佛之教』である。今回取り上げる年代は1913年から移民法制定の1924年までである。

2015年に出版されたアジア系アメリカ人の宗教を網羅した *Asian American Religious Cultures*¹ には、1965年の移民法以降にアメリカにきたアジア人によって多様化・複雑化する宗教情勢と現代的課題が記されているとともに、戦前から活動するアジア系の宗教団体も登場する。1999年に100周年を迎えた浄土真宗の北米開教区（Buddhist Churches of America, 戦前は米国仏教団, Buddhist Mission of North America）の項では、日本人移民・日系アメリカ人と深く結びつき歩んできた歴史が紹介されている。

アメリカ日本人移民史を一瞥すると、1907-08年の紳士協定締結、1913年外国人土地法（カリフォルニア州）、1920年写真結婚の終焉、1924年移民法などが戦前の移民社会にインパクトをもたらしたと考えてよい。紳士協定をもって日本人労働者の渡米が停止され、その後はすでに渡米していた人の家族だけが渡米を許されることになったのだが、この時期はとりわけ女性が多くやってきた時代とされる。ある人は見合写真の交換で結婚が成立して渡米する写真結婚というかたちで、そして多くは日本に一時帰国した男性と結婚してその後に渡米するというかたちをとった。移民社会では家族形成が進み、アメリカ生まれの子ども（以下、二世）が誕生する。しかし写真結婚はアメリカでは不道德であると批判を受け1920年になると、写真結婚による女性の渡米は終焉を迎える。追い打ちをかけるように1924年移民法で日本人移民が停止される。本論では、当時の日本人移民史や移民社会の状況を念頭に置きながらその実情を検証していきたい。

2. 先行研究

戦前のアメリカの日本仏教と日本人移民を取り扱った研究、シアトル仏教会を取り上げた研究をいくつか挙げる。1977年に *Buddhism in America* を著した社会学者テツデン・カシマは、アメリカ本土の浄土真宗教団は、日系アメリカ人が直面したクライシス及び集団のカタストロフィーによって変化してきたとする。カシマは戦前・戦中を3つの時期に分け、第一期は1899年の開教初年から1920年の写真結婚時代終焉まで、第二期は1920年から第二次世界大戦開戦までの、新しい移民が入ってこなくなった時代、第三期を日米の開戦から終戦までとする²。

社会学者 S. フランク・ミヤモトは、1939年初版の *Social Solidarity among the Japanese in*

¹ Jonathan H. X. Lee, Fumitaka Matsuoka, Edmond Yee, and Ronald Y. Nakasone eds., *Asian American Religious Cultures Volume one and two*. Santa Barbara: ABC CLIO, 2015.

² Tetsuden Kashima, *Buddhism in America: The Social Organization of an Ethnic Religious Institution*. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1977, 8.

Seattleで、シアトル日本人社会にある宗教施設を取り上げている。その中で、1924年から仏教会のメンバーが増加していること、祖先崇拜や日本の習慣を重んじる仏教はキリスト教会とは異なった方向性をもった宗教団体であるとする。仏教会はアメリカに住む日本人社会を内向きにする傾向があったと述べていた。³ミチヒロ・アマは *Immigrants to the Pure Land* で、戦前のハワイ及びアメリカ本土の浄土真宗教団ではアメリカ化と日本化のはざままで文化変容が見られるとし、組織・儀式・教義・思想等の検証を通して、日米の資料を横断的に検証し詳細に論じている⁴。その他シアトル仏教会史を詳述しているものとして、郷土史家 Ronald E. Magden がまとめた *Mukashi Mukashi*⁵も挙げておきたい。

3. シアトル仏教会と『佛之教』

シアトル仏教会は、浄土真宗本願寺派北米開教区に属する仏教会の一つで、1901年に日本人移民が結成したシアトル仏教青年会 (Young Buddhist Association) をそのスタートとする。シアトルの日本人は1890年には125人であったところが10年後の1900年には3900人に増加している。移民人口が増加したこの頃に移民男性を中心として、仏教青年会が結成されたと考えられる。アメリカ北西部では最大の仏教会であるシアトル仏教会は、広範囲に多くの支部を有していたことでも知られている。戦前は、タコマ、ホワイトリバー、ベインブリッジ島、内陸のヤキマやスポケーン、さらにオレゴン州に至るまでシアトル仏教会の管轄下にあった。その中で、タコマ (独立した年: 1910) やポートランド (1903)、スポケーン (1910) やホワイトリバー (1912) は、各々寺院を建立し戦前に独立している⁶。

『佛之教』は、シアトル仏教会が発行⁷していた寺報であり、シアトル仏教会及び近隣の仏教会のメンバーを読者としていた。内容は、「會説」「論説」「修養」「講演」といった論述の部分と、シアトル仏教会と近隣仏教会、仏教徒の活動報告が掲載された部分から成る月刊誌である。全巻号日本語で書かれているが、1925年の誌面にロータス仏教青年会 (二世主体) のために1ページが追加され、そこだけが英語である。発行期間は第一巻第一号発行の1904年3月15日から、1927年までと考えられる⁸。現在、『佛之教』は全巻号がそろっているわけではない。特に発行初期のものの中には逸しているものも多い。今回は1913年 (第十巻第一号) から1924年 (第二十一巻十一・十二月号) の中で、調査ができた巻号を中心にみていくこととする。今回取り上げる期間は、アメリカで日本人家族が増え、二世の誕生と成長が見られ、移民社会が拡大・成熟していく約12年間の仏教会である。

³ S. Frank Miyamoto, *Social Solidarity among the Japanese in Seattle*. Seattle: University of Washington Press, 1984(1939). ミヤモトは、移民社会のキリスト教会との比較で、言語的にも文化的にも仏教会は日本を志向しているとして、*Buddhism turns the Japanese community inward* (50) と述べている。

⁴ Michihiro Ama, *Immigrants to the Pure Land: The Modernization, Acculturation, and Globalization of Shin Buddhism, 1898-1941*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2011.

⁵ Ronald E. Magden, *Mukashi Mukashi long long ago: First Century of the Seattle Buddhist Church*. Seattle: Seattle Betusin Buddhist Temple, 2008.

⁶ *Buddhist Churches of America: A Legacy of the First 100 Years*. San Francisco: Buddhist Churches of America, 1998, 325-328.

⁷ 発行については、第十五巻第六号 (1918年6月) から表紙に「Issued by YMBA」と押印されていることから、出版には仏教青年会がかかわっていたと考えられる。

⁸ Ama (前掲書, 271) は『佛之教』出版最終年について、「1926 (?)」としているが、1927年発行のものもあったので、1927年までは発行が継続されていたと考えられる。

本論では、移民仏教徒に関連して仏教会活動と宗教心という2点を取り上げる。まず仏教会の教化団体の活動は移民や子どものためのものであった。さらに、浄土真宗メンバーとしての自覚を強く持ち学び語り合う移民仏教徒の姿があった。特に移民自身が主体的に浄土真宗の教えを深めようとする動きがみられることは、この時代の移民の宗教心を表しているだろう。さらに取り上げていくのは、開教使がメンバーに対して在米仏教徒としてあるべき姿を説いている『佛之教』冒頭の「會説」である。差別や偏見の多いアメリカ社会で仏教徒はどうあるべきかを示している。差別や偏見に対して調和や耐え忍ぶ心を説いているのが特徴的である。これらについて以下に考察していく。

4. 仏教会活動と移民仏教徒の宗教心

『佛之教』には、一世が主体となっていたシアトル仏教会の教化団体の活動が記載されている。毎週日曜日に行われていた日曜説教以外でよく取り上げられているのは、日曜学校と婦人会⁹である。日曜学校を見てみると、その生徒数増加は目覚ましいものがある。1918年、日曜学校に来た生徒数は、一回ごとに20名から28名としている¹⁰。1920年には毎回の出席者数が53、4名¹¹に増加し、1924年には毎月の出席者が300名から400名となっている。シアトル仏教会だけでは間に合わなくなったため分校を設立し、分校でもひと月で300名近くが学んでいたという¹²。日曜学校では幼稚園児や小学生など年齢別のクラス分けがされていた。教材は当初日本から送られてきたものであったが、1924年には「目下教案は北米仏教團本部発行のカードを依用している」¹³とあることから、アメリカで作られたカードを用いたようである。日曜学校生徒数の増加は、日系社会の二世の増加によるところが大きい。現場では一世が中心となって、子どもたちに仏教や真宗について教える形式がとられていた。毎週日曜日午前11時開校し、「同胞一般の児童の為に簡易なる仏教の要旨を授く」¹⁴ことを目的とした日曜学校である。

この時期特有のシアトル仏教会の施設としては、「婦人宿舎」が挙げられる。婦人宿舎は仏教会の近くにある建物を活用した、「婦人及び夫婦の方の為に静穏なる宿舎」¹⁵である。移民女性が増え、様々な理由で働く場所や住む場所に困っている日本人女性および夫婦のために、仏教会では泊まる場所を提供していた。さらに青年の宿泊場所としては「寄宿舎」もあり、「清潔なる寢室廿六室あり青年の宿泊に便ず温室機の設備あり」¹⁶という。仏教会は日本人が多く住む地域に建てられていたことから、当時の移民の状況を反映してこうした施設が準備されていた。英語学校が開かれていたのもこの時期である。平日の夜3時間の授業で無料で行われていた。

教化団体の活動、仏教会が整備した施設は、移民とその子どもたちに対して開かれたものであった。先に述べたように、この当時の移民社会の変化に伴って仏教会も活動を活発化させていった。移民仏教徒もこれら活動に様々な場面でコミットし人的・財政的支援を行なっている。

⁹初期のシアトル仏教婦人会については、Ama（前掲書、82-83）に拙稿の一部が掲載されている。

¹⁰ 『佛之教』15-7（第十五巻第七号、以下、巻-号の順で表記する）1918年7月

¹¹ 同上、17-5、1920年5月、13

¹² 同上、第二十一巻（1924年）全号を通して日曜学校の毎月の登校人数をみた。

¹³ 同上、21-8、1924年12月、17

¹⁴ 同上、「沙都仏教会事業案内」（事業案内は『佛之教』の各号に掲載されている）

¹⁵ 同

¹⁶ 同

『佛之教』には、日米の学僧や学者が記した数多くの論考が掲載されている（末尾の「資料」参照）。浄土真宗の寺院出身の学者、本願寺派勧学の名前が見られる。羽溪了諦、村上專精、椎尾辨匡、前田慧雲の論考があり、勧学の梅原真隆や雲山龍珠の論文も登場する。木村泰賢や鈴木大拙、加藤咄堂の論考、姉崎正治や渡邊海旭、高島米峯、東洋大学学長であった境野哲と大内青巒、武蔵野女子学院を設立した高楠順次郎の文章もある。島地黙雷、島地大等も書いている。当時の仏教研究の最先端で活躍する人物の論考が数多く並んでいる。これら学者の中には、羽溪了諦のようにアメリカに短期間滞在した人がいた。加藤や羽溪がシアトルに来て講演を行った時には、その後『佛之教』にも掲載されている。『佛之教』全体を通して仏教学や真宗学に関する論考を数多く見ることができる。読者である移民仏教徒は、これらの論考に接し、教えについて理解を深め考えることがあったであろう。こうした学びを提供するのも『佛之教』の役割であった。

『佛之教』に出てくるシアトル仏教会の宗教活動をみると、仏教会の創成期を担ってきた移民は浄土真宗メンバーとしての意識を強く持っていたと考えられる。1913年、日曜説教以外に土曜会や土曜講話という集まりが開かれており、仏教や真宗の教えを学ぶ時間が設けられるようになった¹⁷。1920年になると、木曜講話の中で前田慧雲の『真宗問答』をテキストとして用いて、「初心の方にも了解し得らるる範囲のものなれば会員外の人々にも問い合わせて」¹⁸浄土真宗を学ぶことを広く勧めている。木曜講話では仏法や真宗史について学び、毎回15名前後の参加者があったとされる。

同年6月から始まったのが信仰清談會、信仰示談會である。「会員数名の發起」¹⁹によってスタートしたこの會は、当初は50名規模で月1回行われていた。回を重ねるごとに會が白熱していった様子を読み取れる。この會ではメンバーが入信の契機や浄土真宗の教えを話した後、質疑応答の時間があった。1921年、「久間田堀田松本木元松葉出口綿岡諸氏が各自の感涙を注ぎ或は苦悶の後領得せられし安心の風光を表示せんとて各々力説頗る努められたり」²⁰とある。同年にはメンバーから「唯除五逆誹謗正法」について質問が寄せられ、メンバーや開教使が回答した²¹こと、「歡喜心の冷却とその原因」²²のテーマで話し合ったことや、メンバーが「各自の熱涙を注ぎ或は苦悶の後領得せられし安心の風光を表示せんとて各々力説」²³をしたこともあった。會の創設者であり毎回名前が挙がる人物に久間田菊助がいる。余談だが久間田は、後に最も初期の二世開教使となる久間田勝の父で初期シアトル仏教会で尽力した人物である²⁴。

参加者の話した内容をさらにいくつか挙げると、1924年「松本氏の三信を得るざれば往生出来ずとあるが如何にとの問に対し木元氏の答ありしが清水師より三信に就き詳しき説明を聴聞し且つ合三為一の御話があり皆々法悦に咽び」²⁵や、「南無阿弥陀仏の意義を解説し無限者の御慈悲の力が人間の生命の永劫の流の間に奈何に吾人に響くかに付いての談話あり」²⁶とある。午前12時をまわる

¹⁷ 『佛之教』第十卷（1913年）は全号に亘って土曜会や日曜説教について記載がある。

¹⁸ 同上、17-2、1920年2月、13

¹⁹ 同上、17-6、1920年6月、13

²⁰ 同上、18-3、1921年3月、15

²¹ 同上、18-4、1921年4月、12

²² 同上、18-6、1921年6月、14

²³ 同上、18-3、1921年3月、15

²⁴ Ama 前掲書、69

²⁵ 『佛之教』21-2、1924年5月、15

²⁶ 同上、21-8、1924年12月、17

まで続けられることもあった會は、毎回少なくとも 15 名は参加し熱く教義について語っていた様子が伺える。自らの領解を語り合う自主的な宗教活動を行っていた。

移民仏教徒は、高名な学者の仏教学や真宗学の論考を読み、みんなで教を共有する場所を清談會という形で作っていた。アメリカにいても真宗とのつながりを強く持ち浄土真宗の教を大切にするという深い宗教心を保持していたことが見えてきた。

5. 開教使から在米仏教徒へ：「會説」から

戦前、シアトル仏教会には駐在開教使が常に複数いた。中井玄道（1902-07）、藤枝恵範（1904-08）、藤村恵範（1907-08）、本谷断流（1914-18）、藤井芳信（1908-22）、南至玄（1918-1928）、清水祐博（1920-25）、小野恵了（1922-23）が 1924 年までの駐在開教使である（カッコ内はシアトル仏教会駐在年）。

『佛之教』には開教使による論考がほぼ毎回の冒頭にある「會説」に登場する²⁷。ここでは「會説」から開教使による記述をいくつか取り上げるが「會説」の多くは無記名であり、複数開教使がいたシアトル仏教会では、実際にどの開教使が書いた論説なのかははっきりしないところがある。しかしはっきりと言えるのは、「會説」が移民仏教徒に向けて書かれたものであることである。そこには当時の開教使が考えていた仏教徒のあり方を示したものがある。

まず、移民を対象として書かれた文章であるから、「母国」や「故国」といった日本への親密さを表現した文言が登場する。関東大震災が発生した際には、次のメッセージが掲載された。

惨劇に弄ばれた故国を、どうしても救い挙げなければならない、故国は我等の祖先の地であり、父母の地であり、お互いに血を分け、肉を頒った同朋子孫の地である、此のなつかしい故国の、危急存亡とも云はるる秋にあたって、どうして救はずに居られやう、唯だ吾等の力の餘りに微弱なるを悲しむものである、然し、有らん限りの全力を盡して、その萬一を加ふ可きである、幼にして旭日旗の下に育まれたるを思へば、平常の鴻恩を此の時にこそ報ふ可きである²⁸。

故国での震災被災者に対する強い思いが滲み出ている。「血を分けた」や「肉を頒った」といった言葉を用い、日本という国や日本人に深いつながりを感じていることが読みとれる。「旭日旗の下に育まれた」という表現もみられるほどである。

つぎに、仏教会活動への参加だけでなく生活の中で教に触れることを呼びかけるものがある。

吾人仏教徒たるものは、大に自ら策励して、講話會に出席し説教會に参列し、余暇の意の如くならざるものは、佛典祖録を拝読して、其人格を景仰し、其深切なる教旨を熟読玩味して、之を身に示し口に頭はして他に傳へんとを心掛けざるべからず²⁹。

仏教会の礼拝に来られない場合でも、経典など読誦して教をいただき身につけて人に伝えるよう勸

²⁷ 「會説」以外で記名で登場する論考としては、中井玄道（「内に潜める精神の充実」22-5、「子を受する親たちへ」17-5、「願力の自然」10-9、「真宗綱領」連載第 10 号-）や藤井芳信もシアトル仏教会駐在中に論考を出している。（「家庭道徳」18-3、「無我の教」15-2、「人生の矛盾」14-5）。北米仏教団の監督だった内田晃融（「加州排日の真相と吾人の覚悟」17-12、「無常観」17-1 12/21 講堂で話した内容）や、初代監督で日本に帰国した藪田宗恵（「日本初期の仏教伝道」17-7）の名前もある。足利浄圓も多くの論考を寄せる。

²⁸ 「故国の大惨禍を傷む」、『佛之教』21-5、1923 年 5 月、2

²⁹ 「氣風の刷新」、同上、18-4、1921 年 4 月、3

めている。日常生活のなかにおいて宗教心の醸成が必要であることが説かれる。

またアメリカで日本人移民として生活する上での「生き方」についても述べられている。

私共は二千五百年來東洋文明の粹（ママ）を集めて愛愍護育せられたる日本帝国の臣民として生れ來り、今又此西洋文明の極度に發達せる此米國に在住するとは此上もなき幸福と申さねばなりません。

勿論近來在米の同胞は至る處に於て排斥を受けては居りますが、然し之は永久の事ではありませぬ。私共が二千年來養はれ來りたる東洋道德の真髓を體現して彼等に接したならば茲二三十年の中には、互に兩國民の氣心が知れ合ふて、水と砂糖の調和するが如くなるに相違はありませぬ³⁰。

続けて、

怠らずして働くとは過去未來現在の三世に通じた大道を大手を振て歩くとの出来る最も愉快なる仕事であります。吾人仏教徒たるものは、常に三世因果の道理を信じて、涅槃常樂の最高なる妙境に達するを理想として、天に恥ぢず人に恥ぢず、獨立して社會文運の進展に貢獻せんとを心掛けねばなりません³¹。

「東洋」の文明を携えながら仏教徒としてアメリカに生きることが出来ることは幸せであり、現状の悪い状況は好転するという積極的解釈をしている。さらに仏教徒としてアメリカ社会に貢献するよう鼓舞するのである。

我等在留の同胞は堅忍持久どんな困難をも苦痛をも忍び通すの覺悟がなければならぬ、英氣の發する處盤石も破壊すべき大和魂には又積雪重疊の下にあつても屈して折れざる竹の如き氣節を有せねばなりません³²。

この当時アメリカに広がる排日の機運を強く反映した文章である。たとえ差別や偏見にあったとしても、在米の日本人仏教徒は、忍耐や調和をもつことが必要であるとする。同じような考えを当時の北米開教監督内田晃融が、記名で「會説」に述べている。

吾人の心は動き易い、變り易い、然れ共、其心をしかと佛の慈悲の地盤に据る時は、動く事はない、變る事がない。これが不動の信念である。一々の心の解決のき一は、此の不動の信念にあるのであります。吾等は此の信念のもとに、一面に於て米人との同化親善を計り、出來得る丈け排日の部分的理由を除去する事に努め、又た一面には、正義のため、最後の勝利を得る迄、戦はねばならぬ。若し此事が吾人の時代に成功せざるとも、吾等の子孫を通じて、飽迄奮闘を繼續すべきである³³。

我在米の同胞は是から年一年に難問題が増して來るとを覺悟せねばならぬ、是迄は瘦我慢やら空元氣やらで凌いで來られたけれど今後とはとてもそれでは行かぬ深き強き忍耐によって着々と各自の職業に勉勵し、努めて篤実の交際を計り永遠の計を以て此難関を解決せねばならぬから、忍耐力の源泉を如来に得て心の底より溢れ出づる「赤誠」を以て事に当たられんことをのぞみます³⁴。

³⁰ 「人生の幸福」、同上、18-1、1921年1月、2

³¹ 同上、18-1、1921年1月、5

³² 「忍耐力の源泉」、同上、10-12、1913年12月、1

³³ 内田晃融「加州排日の真相と吾人の覺悟」、同上、17-12、1920年12月、12

³⁴ 同上、17-12、1920年12月、2

排日につながるような所業は慎み、同化親善を深め、忍耐と勉励と篤実の交際が必要であるとしている。

続いてアメリカの精神と仏教との親和性が述べられている「會説」を挙げる。

真の米化は米国の理想を実現することに協力することである。(中略)人類相愛の根源は大精神の中にある、此大精神の発動が佛の大慈悲心である。此心を実現するが仏教徒の理想的行為であるから仏教は博愛を説く引導的宗教である³⁵。

さらに続けて述べる。

斯く仏教の根本思想を研め来れば仏教の思想は米国精神に悖る處ではなく、却って之を実現せしむるの力であって、米国人の精神又は信条に向て哲学的説明を與へ、宗教的確信を與ふるものであることが分る。故に仏教徒は一大確信を以てその所信を遂行徹底せしむる時は米人の望む如き真の米化を実現することができるのである。斯の如く仏教の精神は米国の精神と合体一致する者なれば仏教徒は一大勇猛心を発し大菩提心を起して仏教主義を発揮すべきである³⁶。

仏教はアメリカの理想や精神を実現させることのできる教えであり、在米の仏教徒に対しては仏教を大切に生きていくことにより、アメリカ人の求める本当の意味でのアメリカ化が成し遂げられることが記されている。当時の開教使にとって、仏教がアメリカの価値観と敵対しないと表明していくことは、仏教がアメリカで残っていくために非常に重要なことであった。仏教がアメリカに渡り、根をはって生きていこうとしていたこの時代、どのように現地の考え方と同調(協調)していくかは試行錯誤の状態であったに違いない。こうした内容も初期アメリカ仏教の一つの姿である³⁷。

「會説」では、日本人移民の置かれていた差別と偏見という状況を前提としながら、アメリカで仏教徒であることを前向きに受け止める記述が多い。アメリカで組織されて間もない北米仏教団や仏教会、そしてアメリカで仏教徒であることについて、開教使は移民の現状・生活実態・精神面に接近させる形で肯定的に説き、在米仏教徒でいることの大切さを熱心に語っていた。

6. おわりに 一 来年度に向けて

ここで登場した日本人移民は一世と呼ばれ、日米開戦を機に収容所に送られることになる。一世仏教徒の宗教性については研究が十分行われているとは言いがたい³⁸。本論では、仏教会活動と日本人移民の宗教心を管見した。しかしもう少し丁寧に各種資料を読み解きながら、移民・一世の仏教について検証していくことが求められるだろう。今後の課題について2点述べておきたい。1点目は、『佛之教』には白人への伝道や活動が一切登場しない。初期のアメリカの浄土真宗教団では、早い時期から日本人以外にも教えは広まっていた。シアトルに限らず仏教会で行われていた日本人移民以外への仏教伝播の様子、移民仏教徒と白人仏教徒の関係、仏教会のマルチエスニック性についても研究することで、この時代のアメリカ仏教の姿がより鮮明になると思われる³⁹。2点目として、戦時中の収容

³⁵ 「米化運動と仏教」、同上、17-9、1920年9月、3-4

³⁶ 同上、17-9、13-14

³⁷ Amaは、2つの真実(Two truths)、王法と仏法を用いて、初期アメリカ浄土真宗とアメリカ社会・価値観との関係を論じている。Ama、前掲書、20-30

³⁸ 先行研究として紹介した文献以外に、Duncan R. Williams and Tomoe Moriya, eds., *Issei Buddhism in the Americas*. (Urbana, IL: University of Illinois Press, 2010)がある。

³⁹ Amaは、ヨーロッパ系アメリカ人の改宗仏教徒、白人僧侶を取り上げている(前掲書)。また1901年からサンフラン

所という日本人・日系人オンリーの社会の中で、浄土真宗がどのように活動し変化していったのかについても検証していきたい。

アメリカの浄土真宗は日本人移民が直面した様々な困難を共に経験してきた。その中でいかに日本仏教教団が生き残っていくのか、そして教えを継承していくのかを、メンバー、開教使のそれぞれが真摯に考え取り組んできた結果、約 120 年が経過した今もアメリカ最古の仏教教団として存続している。その歩みを振り返る時、日本仏教にもアメリカ仏教にも、さらに宗教伝播史の上にも大きな足跡と学びを残してくれていると感じる。今後もグループ 1 ユニット B では近代仏教史の新たなページを紡いでいきたい。

最後に、アーカイブで『佛之教』を閲覧させていただき、また資料の収集にもご尽力いただいたシアトル別院メンバーの方々に心から感謝いたします。ありがとうございました。

シスコ仏教会の白人仏教徒グループ三宝興隆会（サンフランシスコ）が *The Light of Dharma* を発行している。シアトル仏教会における白人仏教徒と日本人移民仏教徒との関係については、Magden（前掲書）などを参考に研究していきたい。

資料) 『佛之教』執筆者・論文名リスト (一部)

執筆者	論文名	『佛之教』巻-号
羽溪了諦	「人格中心の宗教」	23-1.2
	「現代に対する仏教徒の主張」	20-6
	「人世生活と仏教」	17-5
	「徳育と宗教」	15-9
村上専精	「信仰は手段にあらず」	10-11
	「仏教徒としての修養法」	21-7
	「逆境を利用せよ」	10-3
椎尾辨匡	「人生須らく達観を要す」	21-6
	「生の力と精神修養」	21-3
	「苦楽超越の原理」	17-2
前田慧雲	「豪放と真摯」	15-3
	「苦中の楽」	15-2
	「精神の光」	14-7
	「他力信仰と意志力」	14-6
梅原真隆	「一心一向」	14-5
	「愚者になりて」	21-5
雲山龍珠	「他力の真髓」	22-10.11
	「模範的聞法者」	22-8
	「聞光力」	22-2
木村泰賢	「科学より観たる仏教」	22-7
	「仏教の感化」	15-6
加藤咄堂	講演「仏教の要項」	20-2
	「仏教と精神修養」	10-4
鈴木大拙	「無我の修養」	15-11
姉崎正治	「教祖の人格に対する信念」	22-6 他
高島米峯	「世に處する道」	15-7
境野哲	「徹底せる浄土真宗」	17-7
大内青巒	「精神の確立」, 「運根鈍?」	10-4
高楠順次郎	「人格向上主義の聖者」	22-3
	「理想」	14-8
島地黙雷	「天地我と一体也」	14-4
島地大等	「仏教研究法」	21-2
	「神の概念と因果律」	18-8
	「仏耶両教の根本的相違点」	14-1

各巻の出版年は、第10巻が1913年、11巻1914年、12巻1915年、13巻1916年、14巻1917年、15巻1918年、18巻1921年、20巻1923年、22巻1925年である。